

社会科における思考力・判断力を育てる授業展開の工夫

～学習形態の工夫を通して～



那覇市立上山中学校教諭

上原 敦

目次

テーマ設定の理由	79
研究目標	79
研究仮説	80
1 基本仮説	
2 作業仮説	
研究構想図	80
研究内容	80
1 社会科における思考力・判断力について	
(1) 思考力・判断力とは	
(2) 思考力・判断力の育成について	
(3) 思考力・判断力を育成する手法	
(4) 思考力・判断力の評価について	
2 学習形態について	
(1) グループ学習のねらい	
(2) 指導の留意点	
(3) 学習形態の工夫	
3 生徒の実態調査	
授業実践	84
1 単元名	地理的分野 「都道府県を調べようー沖縄県」
2 単元目標	
3 単元について	
(1) 教材観	
(2) 生徒観	
(3) 指導観	
4 指導計画	
5 本時の学習	
(1) 目標	
(2) 授業仮説	
(3) 本時の展開	
結果と考察	85
研究成果と課題	90
1 成果	
2 課題	

《主な参考文献と引用文献》

《社会科》

社会科における思考力・判断力を育てる授業展開の工夫 ～学習形態の工夫を通して～

那覇市立上山中学校教諭 上原 敦

テーマ設定の理由

中学校学習指導要領ではその理念として、「生きる力」の育成が掲げられており、平成24年度から全面実施される新学習指導要領においてもこの理念は引き継がれている。その意図するねらいは、生徒一人一人が変化の激しい社会において生きるための多くの課題を、自ら考え主体的に判断し行動していくことや、より良く問題を解決する資質や能力を、学校教育の各段階に応じて身に付けていくということである。社会科においてもその理念を受け、基礎的・基本的な知識や技能と同様に、これからの社会で生きるための思考力・判断力は欠かすことの出来ない重要な能力である。つまり生徒に、基礎的な知識、概念や技能を実生活で活用するために、国際化に対応するなど広い視野で社会的事象を読み取りそれを考察することや、考察したことを通して判断すること、学習の過程から生まれた意見を生徒相互で表現し合うことなど、より良く問題解決する力のための思考力・判断力を身に付けさせることが重要である。

これまでの私の授業実践は、自作のワークシートを活用する授業展開が主であった。その中身も知識を習得することに重きが置かれ、教科書や資料集の示す重要語句の暗記や、発展問題を解く程度で、課題解決的な取り組みが少なく個別学習で解答できるものがほとんどであった。資料の活用においても読み取りが中心であった。また授業の形態や展開が固定化しており、形式的なグループ学習で生徒間の練り合いが少なく答えを教え合う程度であった。

以上のことから知識の暗記に偏らない指導の改善の必要性を実感した。そのためには生徒が調べ方や学び方を身に付ける授業実践や、日常的で具体的な社会的事象から始まる課題解決的な学習を数多く設定することによって、社会的関心や意欲を高め、生徒の自主的活動を主体とする授業への転換という方向性が見えてきたのである。

そこで、社会的な思考力や判断力を育成するために、社会的事象を表す複数の地図・グラフや資料を活用し比較検討する活動や、分析や考察を短く文章でまとめさせる活動を取り入れ、さらに授業の形態を工夫しグループ学習等を行うことで、お互いに意見を表現し合い、説明し合う協同的な学習を積極的に取り入れることを目指してして本研究テーマを設定した。

研究目標

社会科における思考力・判断力を育成するため、社会的事象から現れた課題を、複数の資料から考察する課題解決的な授業展開の方法や、生徒同士の練り合いを高める学習形態の工夫とその働きかけについて研究する。

研究仮説

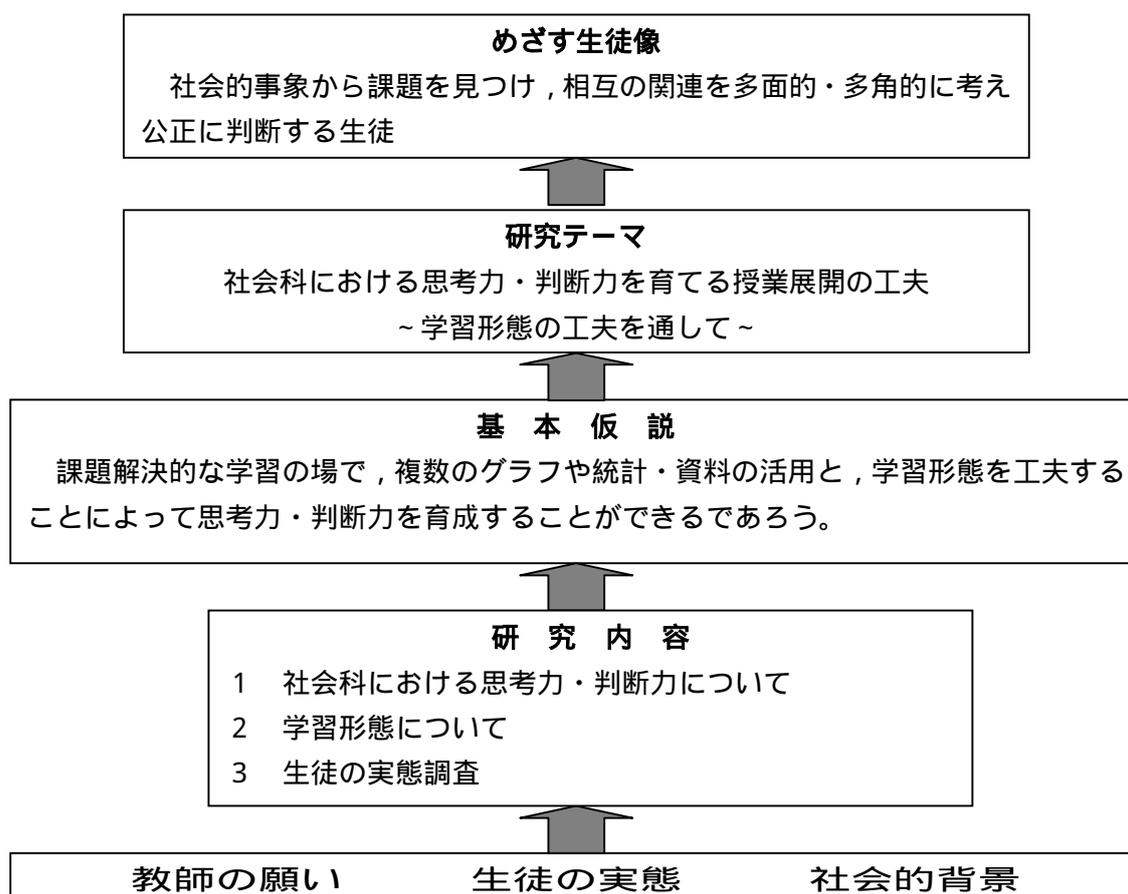
1 基本仮説

課題解決的な学習の場で、複数のグラフや統計・資料の活用と、学習形態を工夫することによって思考力・判断力を育成することができるであろう。

2 作業仮説

- (1) 社会的事象を表す資料の分析の場において、複数の資料を関連させることや比較した後、課題解決をめざし考察したことを自分の文章でまとめることによって、思考力・判断力を持つ生徒が育成されるであろう。
- (2) 各自の意見を表現し説明する場において、グループ内で多角的な思考が生まれ、課題を解決する判断力が育成されるであろう。

研究構想図（めざす具体的な子ども像）



研究内容

1 社会科における思考力・判断力について

(1) 思考力・判断力とは

思考とは「思いめぐらすこと、考え」とあり、狭義には「感性の作用と区別して、概念・判断・推理の作用をいう」(広辞苑)とある。判断とは「真偽・善悪・美醜などを考え定めること。判定。断定。思考の根本形式」とある。このことから思考の中で判断するとし

て一連の作用と捉えられる。

また、天野正輝(1995)は、思考が人間をして人間たらしめる本質的契機であるとするならば、人間形成を課題とする学校教育の目的は、「良い思考習慣と合理的判断力」の育成にあると述べている。さらに、思考は行動や経験から切り離された特殊な能力ではなく、経験の中にあって経験を発展させる創造的契機である。そして、その目的は直面する問題解決を任務としている。その意味するところは、思考が経験のない理性の上に成り立つものではなく、日常生活の過程で矛盾や緊張をはらんだ問題状況に根源し、そこから発生するとしている。そして、教育の中心任務が思考力・判断力の訓練にあるとするならば、学習過程そのものが問題解決の思考を軸にして展開される必要性があると示している。

中学校社会科における思考力・判断力については、文部科学省から示された評価の観点及びその趣旨に示されていることを受けて、社会的事象の問題や課題を、多くの資料を利用して相互の関連を多面的・多角的に考察し、公民として公正に判断する力と定義することができる。

(2) 思考力・判断力の育成について

平成20年3月告示の新しい中学校学習指導要領の社会科の目標に、「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」と掲げられている。この目標は現行の中学校学習指導要領の目標とほとんど重なる。

これにより社会科の学習は、学習の過程を重視し、知識の詰め込み学習を改め、事例を通して課題を追究する学習を推進することや、社会の変化に主体的に対応できる資質や能力のために、思考力・判断力を育成することを示している。具体的には課題を設定し追究する学習の過程で、調べ方や学び方、見方や考え方を学ぶことを通して、身に付けさせるとしている。地理、歴史、公民の各分野の目標の(4)には「さまざまな資料を活用して、多面的・多角的な思考と公正に判断する」と示し、社会科の3分野の特質を生かした学習を進めながら、育成させることも求めている。さらに新しい学習指導要領においても思考力・判断力を、習得した知識や技能を活用させることを通して育成すると示している。

また、指導要録における社会科の評価の観点およびその趣旨において、社会的な思考・判断を、「社会的事象から課題を見だし、社会的事象の意義や特色、相互の関連を多面的・多角的に考察し、社会の変化を踏まえ公正に判断する。」と示している。それが、地理的分野や歴史的分野そして公民的分野のそれぞれに応じてその趣旨が示され、さらにそれぞれの内容項目にあった観点で具体化されている。それらによって、学習の内容に則した評価のよりどころが示され、思考力や判断力の育成が図られつつ評価されるのである。

(3) 思考力・判断力を育成する手法

文部科学省は新学習指導要領において、「生きる力」を育成する重要な学力として、基礎的・基本的な知識・技能の習得、その知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力などを示している。そしてその能力を育成するためには、観察・実験、レポートの作成、論述など知識・技能を活用する学習活動を充実させる必要

があり、その基盤となる言語の能力を、各教科においても記録、要約、説明、論述などを通して育成すると示している。

一方、生徒が自ら考え、判断しながら学習を進めるためには、つまり思考力や判断力をつけるためには、問題解決を基本とする授業の展開が必要だという。高浦勝義(1995)は、「J. デューイの「探究」を例に、「子どもが自ら学ぶためには、何よりもまず、子どもが自ら学ぶ必要なり欲求、その価値を持つこと(問題場面)の発生が大切」と述べている。

さらに、問題解決思考は「観察」と「推理」の作用であるとして、「推理は必ず観察をもとにして行われ、そして推理(仮説の形成)は必ず観察によって検証される必要がある。」と述べ、思考力を育成する授業の理論を説明している。つまり、問題場面などに遭遇した時、過去の経験を思い起こすなどの観察の結果を基に、問題場面の解決や方法を推理し、その方法を実際に検証する活動をするということである。

また、生徒を思考させるための教師側の望ましい態度についても述べているが、反対に教師が、子どもが解決すべき問題を一方的に提供したり、子どもが必要としないことを先回りしてあれこれと指示したり、結論を一方的に教師が押しつけたりする行為が、受身的で指示待ち的な態度をとる生徒につながり、自ら思考したり判断したりしない生徒となっていくとしている。

さらに、奈須正裕(1995)は、教科書で知識を学ぶ時、生徒は「その知識生成にまつわる何らの判断も求められないし、思考することさえ必ずしも必要ではない。」と述べている。つまりその知識は、その時代や社会で承認された、いわば正解としての記憶されるための知識であり、検証を必要とする仮説としての知識とは捉えられないからである。そのためどこか自分とは関係のない、リアリティーの無いものであり、実感を持ってない知識である。そこで、その限界を補うためには、「自ら思考し判断する力を育てるための、直接体験に基づく学習の展開が要請される。」と述べている。

以上のことから、生徒の生活実態に即した問題解決的学習を授業に取り入れることが重要であるといえる。その際、わかったことを意識的に文章で記述させるワークシートの作成にも留意していくが、わかったことだけに留まらずそれから考えたことや、意見を記述させたり、他の生徒に説明させたりすることも重要である。なぜならそれを通してより発展的な思考の段階や、判断した結果が表されるからである。

(4) 思考力・判断力の評価について

国立教育政策研究所の示した評価規準の作成と工夫改善のための参考資料の中には、「内容のまとめりごとの評価規準およびその具体例」が示されている。その内容は、実際の評価を行う単元よりも幅広い内容を含んでいるので、授業においては単元ごとの評価規準にその都度、具体的に設定し直す必要がある。また、どの場面で何を評価するのかという場の設定や、判定の基準(B判定)や判定資料の収集などの計画が必要である。

2 学習形態について

(1) グループ学習のねらい

グループ学習と同義語に協同学習があり、その意味をジョンソン(1993)は、「自分自身と他の学友たちの学びを最大にするために、小グループを使って一緒に勉強させる学習指導

法のこと」と定義している。それによれば、協同して学習することによって生徒はさらに学ぶことができ、「協同すること」を学ぶことは、家族、友人、地域、職場など人生全般において、他の人と一緒に何かを行う上で重要であると示している。

また多様なメンバーとグループになり、共通の目標に向かって活動することによって、自分とは異なる人のことをよく知る機会が生まれると同時に、異なった視点が混在するため質の向上や多様な考えが期待できる面を持っている。さらにこれは、自分とは異なる人と一緒に活動する技能を身につけることにもつながる。

(2) 指導の留意点

ペア学習やグループ学習を展開する中で、相互の見方や考え方の違いが比較できるが、ただ単にその違いを書き写すだけではなく、なぜそのような違いが生まれたのかまで相互に理解できていることを求めたい。そのためには互いにその考えに至った根拠を説明できるよう、学び合いに必要な対話の基礎的なポイントを、事前に個々の生徒に分かりやすく伝えておくことが大切である。以下、安野功（2005）を参考にポイントを次のようにまとめてみた。

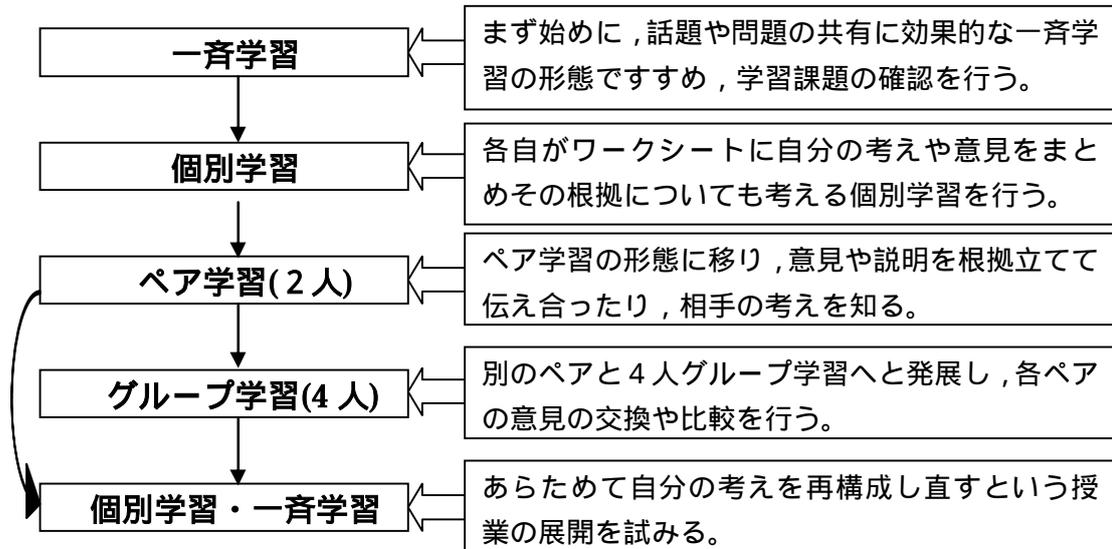
対話の流れと目的	伝えるポイント	聴くポイント
話題の共有	話しの話題を伝え相手の注意を引く。	どんな話を進めるのか耳を傾ける
目的の共有	話題と相手との関係を伝える	自分とどんな関係があるのか注意を向ける
主張や結論の明確化	言いたいことを簡潔に伝える	主張や結論を聞き取る
根拠の共有	根拠の情報を伝える	根拠や事実を聞き分ける
論点の明確化	相手に同意を求めたり、質問を促したりする	分からない点を質問する
建設的な批判と提案に対する受容と吟味	相手の提案を聞き吟味する	相手の不十分な点や修正すべき点を提案する

また、生徒相互の発言の仕方について、有田和正（1995）は「何という資料の、何ページに、これこれの内容が書いてある、だから、私はこう考える。」というような、4段階の発言の仕方を指導することによって、思考し判断したことを説明することから、資料活用力と論理的な思考力・判断力を同時に鍛えることができるとしている。

コーエン（1994）は、「子どもも大人も、集団の中で建設的に協力し合う方法を当然知っているはずだ、と決めつけるのは大きな誤りだ」と述べ、共に学び合うためには仲間と協力し合うための技能を、身につける必要性をあげている。その協調の技能の例として、「謝る、助けや説明を求める、理解しているか確認する、丁寧に反対意見を述べる、仲間の参加を促す等々」がある。これら協調の技能を身につけた、安全な環境の中では、生徒はより創造的なアイデアが生まれる効果や、グループ内で「理由を述べる、例を挙げる」などの技能によって、より高度な思考にも発展すると、その習得の重要性をあげている。

(3) 学習形態の工夫

ペア学習やグループ学習を進めるためには、学習者である生徒にこれから進める大まかな学習の流れを伝えておく必要がある。



3 生徒の実態調査

実態調査として社会科の授業に関する印象や、ペア学習やグループ学習についての経験や関心、ニュースや出来事など社会的事象についての関心など、事前にアンケートを実施し生徒の実態について理解と把握を行う。その結果によって授業展開の方法を検討し、学習目標をふまえ、あるべき生徒像に向けて段階的に取り組むことによって、社会科の目標に迫っていきたい。

授業実践 (中学1年)

1 単元名 都道府県を調べようー沖縄県

2 単元目標

沖縄県の地理的事象の中から課題を見だしそれを追究し、地域的特色を捉えさせるとともに、都道府県規模の地域的特色をとらえる視点や方法を身に付けさせる。

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	資料活用の技能・表現	社会的事象についての知識・理解
沖縄県に対する関心を高め、その調査に意欲的に取り組み、地域的特色をとらえる。	沖縄県の地理的事象から課題を見いだす。課題を多面的・多角的に考える。(沖縄県のこれまでの変化や他県との比較や結びつき) 課題追究の視点や方法を考察する。	沖縄県に関する地図や統計などの資料を収集し、適切に選択する。 沖縄県の特徴を追究し考察した過程や結果をまとめ表現できる。	沖縄県の地理的特色と共に、特徴をとらえる視点や方法などを理解し、その知識を身に付けている。

3 単元について

(1) 教材観

本単元は、沖縄県を事例に、都道府県規模の地域的特色を調べることを通して、多面的な視点で追究する追究方法を学ぶ単元である。指導の方法のポイントは、実際に地域的特色を課題解決的に追究する活動を行い、学び方を学ぶことや、さまざまな資料から地域を特色付ける資料を選択し、それからわかることを分析的に考察させることめざすものである。特色を調べるにあたって、他の都道府県との比較や地理的事象の広がりや変化からわかることなどを意識させたい。まとめるにあたっては、統計などのグラフ化や地図化させることを通して地理的な見方を育てたい。

(2) 生徒観

コンピュータを使った課題調べでは、ほとんどの生徒がインターネットを使って調べることができていた。アンケート結果では、社会科の学習は好きですかという問いに、半数以上の生徒が好きと答えている。また、これまでグループ学習をやったことがある生徒は3分の2以上いて、社会科でも、3分の2以上の生徒がグループ学習でやるのが好きと答えている。調べ学習をすることに関しては、好きとよくわからないが半数ずつ分かれその理由として、まとめ方が分からない生徒が約半数いるためだと推測される。発表に関しては半数の生徒が、グループや全体の前で発表することは大切なことであると思っている。

(3) 指導観

沖縄県の地理的事象の特色を、課題解決的な学習を用いて探求する単元において、ペア学習やグループ学習などの形態を取り入れて学習を展開することによって、その練り合いの中で相互の関係を深めるとともに、その過程で多面的な考えに触れることができる。そして、自分の考えとの比較を通して、思考力や判断力の育成を図りたい。その場面は、課題発見において相互の比較の場面や、グループ内で発表や説明の場面や、全体での検討場面においても育成されると考えるが、同時に表現力の育成にもつながっていくものである。

4 指導計画

時	学習目標	学習内容と活動	形態	指導上の留意点	評価規準と方法
第1時	都道府県の調べ方を身に付けよう。	・単元の学習方法と学習の流れを理解する。	一斉	・都道府県の地理的事象を調べる視点を例示する ・教科書・地図帳の活用例を示す	知識・理解 ワークシート
第2時	沖縄県の特色となるものを見つけ、同時に課題を	・ウェビングを行いながら沖縄県の特色をイメージし、課題を決める。	個人	・ウェビングの説明とワークシート準備 ・各自がウェビングの	関心・意欲・態度

	決めよう。			経過や決めた課題をグループ内で説明させる。	ウェブページシート
第3・4時	沖縄県の特色を示す課題を追究しよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットの検索を通して課題の設定や追求を行う。 ・調べたことをワークシートに文章で要約する。 ・グラフを読み取り，文章でまとめる。 	個人・グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の検索の出典を明らかにするなど説明する。 ・地理的な考え方や調べ方の再確認を促す ・資料不足により，追究が進まない生徒に対して情報源を紹介する。 	技能表現 思考判断
第5・6時	沖縄県の特色から課題を追究し調べたことをポスターにまとめよう	<ul style="list-style-type: none"> ・統計資料をグラフ化したり，地図化するなどわかりやすくポスターにまとめる。 ・これからの沖縄県について理由を示しながら，将来像をまとめる。 	個人・グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフの用途や種類を説明する。 ・ポスター用紙の使い方と準備をする。 ・自分の意見を記入させる。 	技能 思考 ポスター
第7時 本時	沖縄県の特色をまとめたポスターを発表し，グループで理解を深めよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内発表 ・調査した結果を発表し，質問を取り入れながら，深めていく。 ・発表後にわかったことや疑問点をまとめる。 ・わからなかったことなどをグループでまとめる。 ・しっかり聞く ・わかりやすく発表する ・質問しくわしく知る 	グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループ内で発表できるように，援助する。 ・多面的で多角的な意見や質問の有効性を説明する。 	技能表現 思考判断 観察 ポスター ワークシート
第8時	沖縄県の特色をまとめたポスターを発表し，グループで理解を深めよう。 沖縄県についてまとめをしよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ内発表 ・各班で一つの課題について話し合い，その後に自分の考えや意見をまとめて書く。 ・この単元の自己評価を行う。 	一斉・グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループにまとめを画用紙に書かせ掲示し，全員で話し合い検討する。 ・自己評価させる 	資料 ポスター ワークシート 関心・意欲・

5 本時の学習

(1) 目標

沖縄県の地理的事象を示す資料から、本県の特徴や課題を見つけ、ポスターにまとめたことを発表することを通して、グループ内で様々な特色を理解するとともに、話し合いを深め、意見の交換を図る。

(2) 授業仮説

各自が沖縄県の特徴をまとめたポスターを発表し、説明する場において、グループ内で多面的な思考が生まれ、相互の意見交換を通して多角的な視点や判断力が育成されるであろう。

(3) 本時の展開

時	学習内容	学習活動	形態	指導上の留意点	評価規準	評価方法
導入 10分	発表会の手順を確認する。	発表について目標を確認する。 約束事を再確認する。 ・発表中はメモ程度にする ・しっかり聞く ・質問や話し合いで深める ・わかったことをワークシートに記入する。同時にわからなかったことも記録する。	一斉	話し合うことの大切さをわからせる。 ・批判せず質問することの大切さ ・しっかり聞くこと無しに、理解できない ・相手に知ってもらおうようわかりやすく説明する (発声法・音量) 4人グループに移動		
展開 30分	発表から沖縄県の特徴を理解し、質問を通して深める。	グループ内で順序よく発表を始める。 一人の発表時間15分 ・説明5分 ・質問と話し合い5分 ・まとめ5分 二人目の発表をする。15分	グループ	・タイマー準備 ・ワークシート準備 ・机間指導を行いながら必要な生徒やグループを支援する。 ・発表者の支援をする ・おおよその時間を伝える。	表現 思考判断	観察 ポスター ワークシート
終末 10分	わかったこと、わからなかったことをまとめる。	発表を終え今日の活動を振り返りグループで以下のことを話し合い、その結果を画用紙にまとめる。 わかったこと まだよくわからないこと 自己評価する。	グループ	次時の掲示用画用紙を配布する。 シートに自己評価させる。 次時の予告をする。		

(考察)

「沖縄県勢のあらまし」・「沖縄県のすがた」(沖縄県), 資料集「中学生の地理」(帝国書院)のグラフや統計などから地理的資料を選択し, 複数の資料を関連させることを通して浮かび上がる県の特徴をポスターにまとめる際に, グループ内で発表や説明をすることを意識して, わかりやすくグラフや表・地図などを記入させることや, 短い文章でまとめさせる指導によって, 多くの生徒がポスターにすることができたものとする。インターネットで調べた特色ある文化も, 沖縄県地図に書き入れさせるなど, 宮古・八重山諸島と沖縄本島を地図上で比較させることにより, 県全体の広がりとして表現することができたものとする。

提示する資料の注意点は, 中学1年生が読み取ることができ, 県の特徴ある産業の推移や変化が, グラフに表されている資料を示すことにより, イメージだけではない正確な情報を知ることができるものとする。実際にグラフを読み取り, 短い文章で沖縄県の特徴をポスターに表現させたが, 生徒の個人差により, ポスターまとめの段階で個別対応のための補習授業も必要なことであった。ポスターにはこれからの沖縄県の将来像についても発問したが, このように発問の内容を自分の考えや意見をまとめることに重点を置くことによって, 考えて書く生徒の増加が見られたことなどから, ポスターやワークシートの内容と形式に留意することが大切なことだものとする。

検証2

各自の意見を表現し説明する場において, グループ内で多角的な思考が生まれ, 課題を解決する判断力が育成されるであろう。

(手立て)

自分で調べたことや今後の予測についてまとめたポスターを, グループ内で発表した後, 質問や話し合いを通して, 新たに気づいたことやわかったことなどをまとめさせる。

(結果)

アンケート結果においても, 全ての生徒が発表することができたと答えており, 発表後の話し合いにおいても, ほとんど全ての生徒が話し合うことができたものとする。

表3は, グループでの発表や話し合いは大切かという, アンケート結果の比較だが, 大切だと思う生徒の数が検証授業後は20ポイント以上増加している。また表4の通り, グループ活動後, 自分の意見をワークシートにまとめる生徒も見られた。

表5については, グループ内で発表内容についての質問や意見だけでなく, 発表方法やまとめ方についても建設的な相互の意見交換が多かったことが, 事後のアンケート結果からわかった。

表3 グループなどで考え, 話し合うことが大切だと思うか

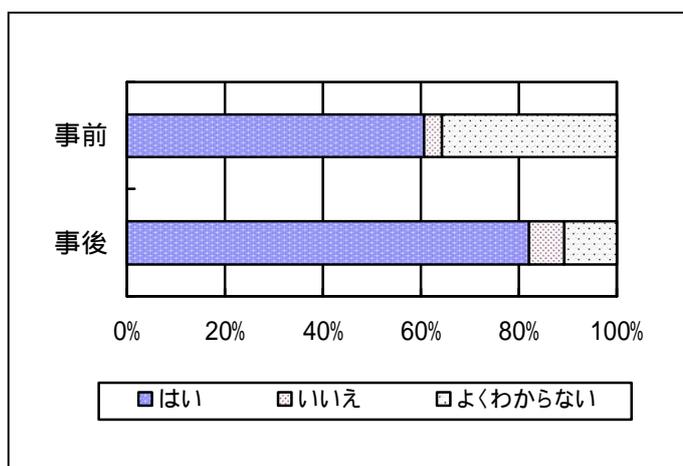


表4 話し合いを通してわかったこと・自分が思った意見

	発表で知ったこと	自分が思ったこと
A君	・現在60歳の、昭和21年生まれは人口が急激に減っている。それは戦争があったから。(略)	・戦争はやっぱり嫌。戦争で多くの人死んだことがわかったので、本当に戦争は二度と起こしたくない。
B君	・(県内に)基地は全部で37カ所ある。基地は、北部・中部や南部地区にある。	・沖縄のほとんどが米軍基地なので、米軍基地を無くしてほしい。

表5 グループ内で良かったアドバイス

<ul style="list-style-type: none"> ・グラフなどに表すと良いし、もう少し絵を描いた方がよい。 ・どこに色を塗ったらいいか教えてくれた。 ・指で示しながら読むといい。 ・もうちょっと大きい声を出すといい。 ・ゆっくり発表した方がいい。 ・教えあってできた。
--

(考察)

単元の第1時にこれからの学習の流れの周知と、第6時に発表や話し合う時の態度の留意点について、自分たちで考え全体で確認したことにより、本時においては、ほとんど全ての生徒が発表や話し合うことができ、互いに質問したり教えあったりする目的は達成されたと考える。アンケート結果から、話し合うことの大切さを感じた生徒が増加したのは、ひとり一人が異なるテーマを持ったグループ内で、互いに伝え合うことによって幅広く知ることにつながるという、グループ活動の意義を理解したためだと考える。表4にあるとおり、発表を聞いて自分が思考したことを記入することができた生徒もあり、今後は建設的に批判する態度の育成も含めて、思考したことを記述させる学習を積極的に取り入れていきたい。

研究成果と課題

1 成果

- (1) 課題解決的な学習方法により、学び方を学ぶことや、複数の資料から考察したことを短く文章でまとめたり、グラフや表に表すことを通して思考力を育成することができた。
- (2) 調べたことを相互に説明することによる論理的思考の育成と、話し合うことを通して、グループ内で多面的な意見に触れ、自分の感想や意見を再構成することができた。

2 課題

- (1) 指導計画を見直し、十分に意見交換できる時間と手法の構築を図る。
- (2) 生徒同士の練り合いを高めるために協調する技能の習得や、グループ活動の意義の理解について、一人一人が自覚できるように継続して実施する。
- (3) ペア学習やグループ学習を今後も継続することを通して、学習面での向上のみならず、学級内や学年における人間関係づくりの観点からも相乗効果を高めていく。

《主な参考文献と引用文献》

- 『中学校学習指導要領 解説 社会編』 文部科学省 1998
- 『教師達の挑戦 授業を創る学びが変わる』 佐藤学 小学館 2003
- 『先生のためのアイデアブック - 協同学習の基本原則とテクニック - 』 日本協同教育学会
- 『思考力・判断力』 北尾倫彦編集 図書文化 1995